



—あつたへのムルヘン—

今日しはらくいりで裏山に足を運  
びました。

もうすかり春です。

春、ていすね、何となく優し  
い感じがして。

途中で、小さは坂道があらうです。

いつもは、陽があたらなくてしめしめ  
した所なんです。

でも今日はそこにすみれの花が一  
輪だけ咲いていて……

すみれ、そんな場所が好きなんです。

僕が見かけるのは、いつも日陰の  
せりとした所よ。

それ、一輪だけ……

「ほら、これがすみれですよ。」  
そう、もうおれは十年以上も前にな  
ら、たんです。

たぶん理科の授業だ。たのし  
い、受け持の先生につれられて、学校  
の裏山に行、たのは

「ほら、これがすみれですよ。」

そう、もうおれは十年以上も前にな  
ら、たんです。

たぶん理科の授業だ。たのし  
い、受け持の先生につれられて、学校  
の裏山に行、たのは

不思議です。

今でも何故か顔に残、いてるんです。

あの時のすみれの花……

そう、そんな、あの時のすみれも、皆に  
見られて、恥すかし、さうにう、ついで  
い、ました。

もし、かして、今日のすみれは、あの時の  
すみれの子孫が、も、知れませぬね。

あと一月も過ぎると、僕の家の庭に  
三色すみれが咲くでしょう。

でも、う、うとして、上に「三色」が、つ、いた、た  
け、なの、に、あ、んな、に、生、ま、て、し、ま、つ、の、で  
し、う、ね。

花は、大、き、い、し、色、も、鮮、やか、で、……

すみれが、可愛、さ、つ、な、く、う、い、に、陽、気  
な、ん、で、す、ね、三、色、す、み、れ、で、

すみれ、て、内、気、な、ん、で、す、ね。

美しいのだから、まわりの雑草たち  
に見せつけてやればいいのに、遠慮  
がちに、う、つ、向、いて、咲、い、て、……

でも、すみれの花、て、い、い、で、す、ね。  
だって、と、て、も、優、し、さ、う、だ、か、ら、……

それに、夢、が、あ、り、ま、す、ね。

いつのまにか小川が流れ出して、その  
音が、か、す、か、に、聞、こ、え、て、く、る、ん、で、す。

「ほら、これがすみれですよ。」  
そう、もうおれは十年以上も前にな  
ら、たんです。

たぶん理科の授業だ。たのし  
い、受け持の先生につれられて、学校  
の裏山に行、たのは

「ほら、これがすみれですよ。」

そう、もうおれは十年以上も前にな  
ら、たんです。

たぶん理科の授業だ。たのし  
い、受け持の先生につれられて、学校  
の裏山に行、たのは

「ほら、これがすみれですよ。」

そう、もうおれは十年以上も前にな  
ら、たんです。

たぶん理科の授業だ。たのし  
い、受け持の先生につれられて、学校  
の裏山に行、たのは

「ほら、これがすみれですよ。」

そう、もうおれは十年以上も前にな  
ら、たんです。

たぶん理科の授業だ。たのし  
い、受け持の先生につれられて、学校  
の裏山に行、たのは

だけと、三色すみれ、て、リアリスト。

夢、が、な、い、ん、で、す。

と、こ、と、な、く、冷、た、い、ん、で、す、ね。

大人、て、三、色、す、み、れ、が、好、き、な、ん、で、す、ね。

僕の両親は、毎年咲かせて、いらんです。

と、て、も、高、価、な、三、色、す、み、れ、を、

買って、そのたびに僕は無感動で男

と、評、さ、れ、て、苦、笑、し、て、い、ら、ん、で、す。

だって、い、つ、も、ほ、め、て、あ、や、り、い、か、つ、……

そんな、こ、と、は、と、う、も、い、い、ん、で、す。

ただ……

さ、と、あ、な、た、も、す、み、れ、の、花、が、好、き、……

そ、う、思、っ、た、た、け、な、ん、で、す。

そ、う、思、っ、た、た、け、な、ん、で、す。

そ、う、思、っ、た、た、け、な、ん、で、す。

そ、う、思、っ、た、た、け、な、ん、で、す。

そ、う、思、っ、た、た、け、な、ん、で、す。

そ、う、思、っ、た、た、け、な、ん、で、す。

そ、う、思、っ、た、た、け、な、ん、で、す。

そ、う、思、っ、た、た、け、な、ん、で、す。

そ、う、思、っ、た、た、け、な、ん、で、す。

そ、う、思、っ、た、た、け、な、ん、で、す。

そ、う、思、っ、た、た、け、な、ん、で、す。

そ、う、思、っ、た、た、け、な、ん、で、す。

そ、う、思、っ、た、た、け、な、ん、で、す。

— The Story —

去年の八月と今の夜の二十です。お母さん  
 へが僕の家を訪ねました。おとは  
 高校の方面が戻りたためもう一年以上  
 も合っていないとさんでした。そんな後がこ  
 の一年間の軌跡を僕に語ってくださいました。  
 以下、後列記です。

……高二の前年 僕はとても陽気だった  
 新入、好きな人（同じクラスの女性）と前年  
 は身がからからいって言葉が溢れ出てきたんだ  
 考えてみればその頃が、ひかれていたのか  
 ともいえない。とても静かだ。僕もそうい  
 だった。……  
 秋も終わって冬になり始めた頃だった。  
 そう、今からもう一年前だった。僕も

心の中が急に変わり始めたのは、今思い出  
 して、全く陰気な時期だった。……  
 うい、今にも雪が降りたしその反響の  
 音に涙が落ちた……そんな感じもがすう  
 んた。

その頃 僕はまるで何かにとりつかれたか  
 みに本ばかり読んでたんだ。……  
 くさんの本にたいく感懐き身でね、僕か  
 万歩いじめられたりしてことと痛いはと思  
 いし……そんなんだ。自分の考えとか価値  
 観がなくなってしまっていたんだ。……  
 てくるものと、たまらぬ不安に襲われ  
 てね。今考えてもそつとすう。……  
 僕の体面を守るために足が地につか  
 ないんだ。僕はとてもあせったさ。早く何  
 かにはかりつけたら……そんな気がしてた  
 んだ。

二月には……さらにはひどく……  
 だ。……冷えき、た部屋に一人で……  
 まるな、空しくなり……と……に……  
 てきて……んだ。……た……  
 ……そんな日は、……と……  
 ……は、……と……  
 ……の生き方が……  
 ……り言葉で……  
 ……僕も……  
 ……き……  
 ……り……

……まで……  
 ……め……  
 ……は……  
 ……り……

の冷たい……  
 ……  
 ……  
 ……  
 ……

……  
 ……  
 ……  
 ……  
 ……

……  
 ……  
 ……  
 ……  
 ……

僕もその一側だ。た。そして誰にでも  
たてつくように行つた。僕はいつのまにか  
異端者の道に歩み始めてしまったんだ。  
しかも、誰か行くと友人を見て、勝つ  
誇つて、そのだからどうしようもないさ。  
それから、一ヶ月以上たつたろうか。も  
う僕に口をきいてくれる者はほとんどい  
なかつた。もう完全に孤立しちゃつたのさ。  
それでも、僕は、意地を張つて、平氣な顔  
を装つていたんだ。内心は、どうしよう  
もなく淋しい、たぐせに……。

人間、一人で生きて、とても生きてゆけ  
ないものだね。よく、孤独が好きなだなんて  
言う人がいるけれど、そんな人は、どれほど  
一人だけであることが、つらいかわかつていないん  
だ。まして、恋をしてしまつたら……。  
そう、今でも、は、きり覚えているよ……。

の顔をもっともに見られなくなつてしまつたんだ。  
ただ、あの時の智子さんの姿が、顔に、こぼりつて  
いるんだ。うつ向き加減に走つて、いたあの人  
の姿が……、何故あんなに美しく見えたんだ  
ろう。

三年になつて僕は、智子さんとクラスが違  
つてしまつた。それも、悲しいけれど、反面、と  
したよ。だって、あのひと毎日顔を会わせていた  
ら、僕の涙が、かいてしまつたろう。

それにしても、僕はだらしない男さ。あ  
の時以来、まるで哲学めいたことばで考へな  
くなつてしまつてね。もとのように陽気に過  
ごせるよつになつて、自然に、友人たちも僕の  
所へ戻つてきてくれたよ。

もし、青春期の、特徴を、迷いと恋とで表  
わすことが出来るのなら、僕も、人並みの青春  
時代を持つことができたと言えろのだからね……。

三月のある放課後のことだ。その日は、  
用事があつて、身と、帰りが遅くなつてしま  
つた。教室には、もう四五人しかいなかった。  
その中に智子さんがいたわけなんだけど……。  
その日は、すいぶん暖かかつた。それで、僕  
は、つ、コートを教室に忘れてしまつて、下  
駄箱の所で気がつた。僕は、すぐに教室に  
引き返つたんだ。その時だつた……。  
教室の入り口の戸を開けた僕は、びっくりし  
たよ。目の前に智子さんが立つて、しかも、  
僕のコートを、持つてゐるんだ。

そのあと、は、すろで、差アでも見てたかのようだつた。  
智子さんは、いさなり、コートを僕に投つつけると、  
階段の方へ走つて逃げてしまつた。なんだ、何  
も言わな……。  
——、それから数日の間、僕の心は、全く、  
虚脱状態だつた。その時以来僕は、智子さん  
さ……。

それから、僕のこの一年間のせめてもの願ひだ  
さ……。  
——、  
いつのまにか、朝日が僕たちの前にある空は、ほ  
のこほり、カッパを脱ぎ出し、出つてしまつた。僕に  
は、それが彼に、希望を手えて、るよ、うな、気  
がしたのです……。

III

くおぬりに  
左人と、ところが、知んさえ一人もいなくなつた。この高  
校に来て三年間、こんなに多くの友だちを失つたと  
予想できた。ううか……。これだけ、まじま  
じ、たクラスが、今まに、あつた。たうか……。

三月のある日、私は旅先で森の中へ迷い込んでしまいました。いくら捜しても道が見つかりません。幾時間ほど経ったでしょうか。川沿いで小さな家を見つけた。おぞるおぞる家の中を覗いてみると、きつねさんとうさぎさんが住んでいました。私はうさぎさんに近寄り、ここはどこなのですか？この森から出るにはどうすればいいのですか？と尋ねました。するとうさぎさんの言うことには、ここはほっかいどうという所で、この森から出るには、川をたよって歩いて行けばいいとのこと。その日の晩はその家に泊めてもらうことになりました。

うさぎのカメ吉君が畑でつくったニンジンとごぼうをきつねのタヌキ君がりで採ったお魚をちぎろうとしてくれました。

三にんでおいとおかぶをしました。  
型朝カメ吉君とタヌキ君にお礼を言ってみようとして下へ行きました。しばらく歩いて行くと大きな滝がありました。立て札によると黒糸の滝というそうです。またこの川は二峰川(にぶがわ)というそうです。どこかで聞いたみたいだな覚えませんが、少し違っても構いません。滝の下ではくまさんがお魚を採っていました。さらに歩いて行くと大きな湖が見えてきました。どうやら人造湖の様です。下流の方にはダムが見えます。湖の

19ばん 川野瀬正美(おのせ まさみ)  
たんじょうび しょうわ三四四年三月十日  
○○○はかに座うお座の人と愛称がいいんです。その反対です。

岸に冷めて歩いて行くところのダムはどこかで見た様な気がしてきました。そうです。私が森に迷い込んだ頃見えていたダムなのです。ダムが見えていたから私はそのままとんぼん歩いて行ってしまったのです。ダムの名前は湯田ダム—岩手県仙人町—  
川に沿って下って北上線の和賀仙人駅に着きました。

東北線の北上駅へ出て十和田一号で水戸へ帰ってきたのですが、同席した北海道から来たという女性にこの話をしたところ、その女性はこんなことを話してくれました。

——あなたが迷い込んだところは仙人村の仙人部落にちがいないですね。むかしから北海道の仙人村と岩手県の仙人町とは仙人部落という森でつながっていると言ひ伝えられています。そしてその森を通れば海を渡らないでも本州と北海道とを行き来できたという話を聞いています。——  
そう話していた彼女自身、とことなく迷い込んだところのある女性でした。

◇永島和彦先生へ◇

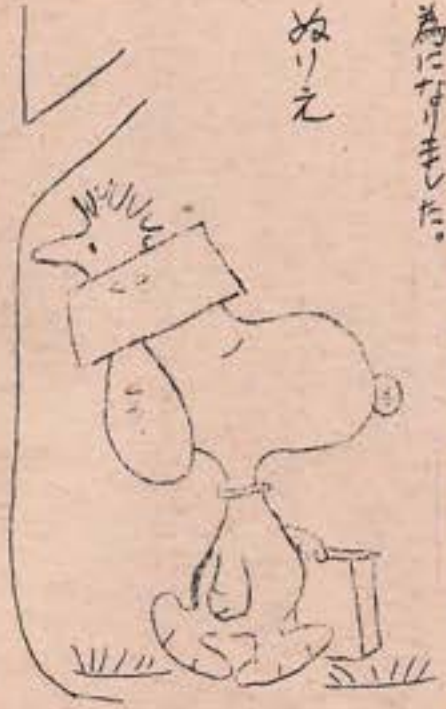
三年間いろいろお世話になりました。ありがとうございます。うさぎいしました。

◇36くみのみんなへ◇

いろいろありがどうございました。居心地よかったですなあ。三年間でいちばん……  
これからおはんはってくださいね。さようなら。

それから永島先生、近代文学史の講義たへん為になりました。

ぬりえ



文集だなんて——書く事がありませんでした。最後までお世話になっしまいました。  
一九七七年四月三日午前二時五分、大宮にて

海を通らないで北海道へ行ってみませんか。いちどうさぎのカメ吉君ときつねのタヌキ君に会いたいと思ったりしませんか。



エニバーサル—  
タテガタコンポメルカトル図法

——  
一部分フロンティアです。あれからが。(実際かなり遅いです)  
~~~~~  
~~~~~

ワインを飲むときは喫煙はよしましなう。  
(理由のわからない人は安蔵君に教えてもらいまは)  
ワインを飲むならメドック産。ウイスキーなら本場スコッチ。ビールはせつたいビール産。(これ本意です)



しうりかてし、ノカ。

第三章 ミカビシ マしん 向て悪とせりやリ人ハ

高取は奇はもつ終りセリが、いよいよ自分には長じたかどしうか。私は中学の  
とまともで真面目な方りとした。想像を絶する程です。それは花ニカを  
あるまで、それが中学三年の時、はもうどうにもむらた、自分の真面目でし  
た。自分でもそれか嫌だ、たけど、結局三年はそれでも、亦すして高取ま  
果として少しは、私にやわらかくな、たでしうか。それは、私にのみ、  
たでしうか。自分では少しは、いよいよ、ジとして変ね、たし、カ  
り、花子には、たし、思、ています。先生に、おす、の、イ、メ、  
相、た、た、し、情、定、り、こ、と、さ、あ、て、も、教、じ、し、く、お、り、す、し、  
下、ま、い、ま、と、た、て、こ、り、だ、こ、う、い、う、い、う、か、ん、い、て、し、  
た、い、ん、か、も、こ、れ、は、私、に、大、胆、な、こ、り、か、う、い、う、か、う、い、  
い、る、お、と、こ、の、お、か、い、し、ん、の、お、宿、へ、お、か、い、た、り、ん、と、か、  
想、い、こ、ら、い、こ、も、か、た、中、三、が、あ、て、お、り、し、た、こ、も、あ、り、  
た、い、ん、か、も、た、こ、も、あ、り、お、れ、い、ま、い、う、か、ん、は、高、取、  
こ、い、す、ま、と、は、う、い、く、い、ま、い、す、え、ん、

第四章 愛のり歌 (下) 中三ウケ歌

たこころ、て、あ、ら、ま、こ、こ、い、は、ん、た、か、金、怒、す、こ、う、  
た、た、た、た、た、た、た、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
音、ま、た、い、り、い、す、お、れ、は、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、  
道、ミ、し、て、い、あ、ら、い、う、こ、と、い、す、お、し、い、お、れ、  
都、と、して、大、変、有、意、な、こ、と、い、う、こ、と、い、す、お、れ、  
た、り、い、す、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、  
思、い、こ、ら、い、こ、も、か、た、中、三、が、あ、て、お、り、し、た、こ、も、  
た、い、ん、か、も、た、こ、も、あ、り、お、れ、い、ま、い、う、か、ん、は、高、  
こ、い、す、ま、と、は、う、い、く、い、ま、い、す、え、ん、

正確に、い、い、何、の、音、を、か、と、ま、え、う、と、お、れ、ん、  
したい、思、い、う、り、い、す。ま、し、て、道、云、上、の、い、を、  
た、い、い、す、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、  
たり、と、や、か、ま、は、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、  
Genius is one percent inspiration and ninety-nine percent perspiration.

夫、し、て、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、  
夫、し、て、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、  
夫、し、て、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、お、れ、

筆筒 舍利別

文集は書いたことないので何を  
書いたものかと悩んでいたら劉頌河  
もつかんでこなかったのぞ

生心たらうに

水戸に生かされて、オオゴトともしの  
加う大さくも、新莊に入らう同  
田君と元本君がいて勝田に行  
て中根小に入らう陣とリ、パーを  
してたら勝田中に入らう水戸ニ中  
に入らうテニスをしてそのつら水  
戸一高に入らうフット吹三と思つ  
てたつ石間に東てあ、というよに三年  
かすきたと思つたらう卒業文集をい  
てます

申しあげておりました、大 関 俊 行  
君です

昨日、家の整理をしていました

小物入れの中から一つの茶湯色  
の封筒が出てきた。その中に一枚  
くらの便箋に、むしりしほくに  
は読めない字で書いてあり、その  
父の戦友からの手紙を、さうで  
三十年以上も前のものなうです  
父は志願兵として出兵して生死  
の境を、さうよい歩いて来たが、でき  
なかつたがために、たまたま、さうで  
すが、現在も当時の部隊の人た  
ちと同期生会のもつと、とを毎年  
行つてます。クラスり他の人の話を聞  
いておる、けいこうクラス会とや、つて  
どうですか、ほくの、小津校も中津  
校も念仏的、にやらちいので、残念  
でなりません、せむクラス会をやりま  
しょう

三月間はじめて一つの学校で生活しよ  
した。選んで、今までの生活でも、と  
も変化の少なかったのが、この高校時代  
のさうな感じがします。小津校のときは、同  
校にカバンを持っていかねたり、中津校  
のときは、カバンのカバンを持って帰ってきたり  
したもので、すが、高校では、一枚の下じ  
か、二枚に、ふえて、さう、たたりでした

部に入らう、て、わかつた、ことが残念で、なり  
ません。他のサークルにも入らう、わかつた、ので  
、学校の活動には、ほとんど参加し、わ、て、し、  
した、だ、わ、つ、い、く、ら、か、でも、参加、で、う、な  
、学祭、祭りのクラス、参加、して、も、身、を、し、い、で、し  
な、夜、々の、同、時、ご、う、ま、じ、ゴ、リ、ゴ、フ、と、女、風  
は、ご、う、ま、じ、よ、つ、こ、れ、は、ご、う、か、と、さ、わ、い、な、け、い、  
ご、自分、で、一、番、真、剣、に、敵、り、組、ん、だ、こ、こ、で、い、  
、クラス、の、は、じ、め、の、こ、ろ、は、な、ん、と、ち、く、ば、ら、い、  
、と、い、つ、度、か、し、た、の、で、す、か、私、は、私、に、は、く、ら、ス、五  
、と、わ、れ、た、こ、は、つ、か、し、く、て、な、り、ま、せ、ん

話によると、ひとりサントリール、オールド、一瓶を  
ちびり、して、ま、つ、人、が、い、る、さ、う、で、す、か、。私、は、マ、  
、る、酒、を、た、だ、買、つ、て、飲、ん、で、い、る、の、で、は、つ、ま、ら  
、る、い、と、思、い、い、ま、せ、ん、か、。うち、では、ま、く、焼、酎、を  
、買、つ、て、果、実、酒、を、作、つ、て、飲、み、ま、す、。し、も、  
、さ、う、さ、う、い、い、な、ア、ッ、パ、ル、な、も、よ、い、の、で、す、か、。欠  
、敗、する、と、飲、め、た、も、力、で、は、あ、り、ま、せ、ん、。ゴ、ー、ヒ、  
、は、し、ず、み、か、は、い、り、ま、す、か、。カ、オ、リ、が、い、る、こ、も  
、い、え、ま、せ、ん、。ニ、ニ、ン、ン、ヤ、キ、ク、ヤ、い、ら、う、い、ら、う、  
、草、も、飲、み、に、い、り、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
、く、に、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
、て、み、て、下、さ、い、ね

つくりやさい、マニス、酒  
、ア、ニ、ン、一、杯、水、で、流、つ、て、中、央、に、ナ、イ、フ、で、磨、き、出、し  
、た、た、い、て、割、り、を、い、れ、。広、口、び、ん、に、グ、ラ、ニ、ン、一、杯、  
、ハ、有、ま、と、焼、酎、を、い、れ、。で、二、三、日、間、。ほ、ご、よ、い、  
、カ、ホ、リ、と、コ、ク、が、た、ま、ら、な、い、よ、  
、た、け、い、あ、ん、ま、り、の、ん、ど、に、な、ら、な、い、で、ぬ、



IK. WIENO

自分にくちかつかつことは勝利のうちの最大のものである

—ポラトニー

自制力のある人が自由な人である

—ポタゴラス

人城を頼らば城人を捨せん

—織田信長

世の中には福も禍もない。考え方でどうにでもなる

—シェークスピア

自分を幸福だと思つて人間が幸福なのだ。

—プリウスサイラス

生活についてはずつねに満足せよ、自分については満足

—ネーサン

人間は寛容すること創造することによつてのみ幸福が

—アラシー

難にあつても、難を避けて身を逃るべからず。

—貝原益軒

男子堂に死中に活を求むべし坐をがらにして窮すべからず

—後漢書

道りかといえども行かざれば至らず

—荀子

勇断なき人は事を為すこと能はず

—島津齊彬

過失をひとつも犯さない人間は常に何事もしない人間

—エドワードヘルプス

青春は何もかもが実験である。

—ステファンソン

すべてものごとには終りがある、従つて忍耐は成巧を

—ゴリキー

成巧とは1%の才能と99%の努力である

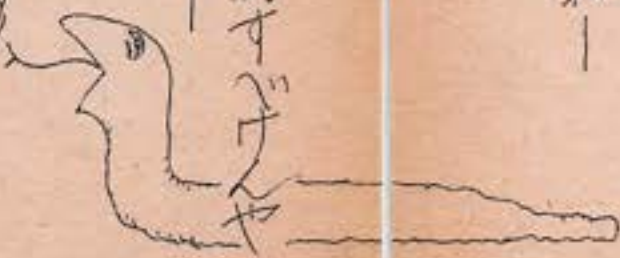
—エジソン

非難のどん底にいる時に友のかけまくれる言葉ほどうれ

しいものはない。その昔ほど美しいものはない。

※まだ見ぬ敵におびえるものは敗者よりも弱し

—和せくん



過去

長田和人

「艦長、前方に緑色の植物のある、火星を見えます、高等動物が住んでい

るようです。」

「阿堅は、長い宇宙旅行の帰りの飛行を続けていた。

「はい、すこし休んでいくか。」

阿堅は、その星に着陸して、その中から出てきた宇宙人は新鮮な空

気を久しびりに吸った。

その星の動物は、その星の中で最高級である下大学を出て今はウソと

遊んでいる外交官を歓迎委員とした。

宇宙人は阿堅から翻訳機を取り出し、歓迎委員と会話をしはじめた。

「すこし、この星で休ませてくれなさいか。」

「はい、どうぞ、さうして下へ下へ。」

「ところで、この星の生物は、せせと仕事をしているものと何もしないでそれを

見ているもの、この二種類があるけれど、仕事をしているのは奴隷ですか。」

「いえ、そうでは有りません。何をしていないものは、過去において、強欲したから、現

在、おあつていらぬのです。」

「強欲とは、同じようにやるものではないのですか。」

「は人とうは、さうなすですが、能力の差が有りまして、強欲のできる悪いの

は、途中で学校をやめてしまふかです。」

「それおれの目では、人の方が悪いけれど、さうもありません。」

「昔に、この星の時間では、生手れてから十八年目か、その人がおれを

です、頭の上には、さらさらと上級学校に進み、その星を出て、働き、何年かす

ると管理職という職を得て、今見えるように、なにもないような生活

を、はじめたのです。そして、強欲のできる悪いのには、上級学校へ進めず、

おどろきに、見えないように機械の歯車の上で生きているのです。因るの

は、その中間のものたちです。上級学校へ行かずに、さりとて、そこで仕

事をする、はじめることにも、さうして、抵抗を感じた、その星です。ある

会社では、その星の子供を上級学校へ行かそうとする、親心につけて、

多額の授業料を取り、上級学校へ入学試験に合格する方を、その

子供たちにおしえて、その星です。その星の会社か、その星の親心につけて、

「どこかで聞いたような話だなあ。」

「しかし、十年ぐらい前から、会社の上級学校が始まりましたので、上級学校を

出ても、よい職場につく、に、なっています。」

宇宙人は、その星の星を、旅かつかれを、いやらしく、自分たちの星に向かた。

宇宙人は、その星の星を、おと、なから、口を、こころ、つ、ふ、や、い、た。

どこかで聞いたことのある話だなあ。

阿堅は、どこにも緑の見える、自分たちの星に、無事帰還した。どここ

には、着陸地さの、目、じ、り、と、して、その星の、道、跡、を、ある、東京、タワー、が

た、た、て、いた。